

Heisig メソッドを取り入れた漢字協働学習（実践報告）¹

(Kollaboratives Kanji-Lernen nach der Heisig-Methode: Ein Praxisbericht)

宮山麻里枝 Miyayama-Sinz, Marie
(Technische Universität München ミュンヘン工科大学)

要旨 / Zusammenfassung

Heisig メソッドとは、哲学者 J. W. Heisig が自身の経験をもとに開発した漢字習得法である。従来の漢字教育とは全く異なるアプローチで、教室授業ではなく独学で日本語を学ぶ学習者を対象としているが、ミュンヘン工科大学言語センターでは、2022 年春からこのメソッドを取り入れた漢字集中コースを提供している。独学用のメソッドをいかに協働学習に役立てるか、そのコースデザインと具体的な実践を紹介する。

Die Heisig-Methode ist eine Methode zum Erlernen der Kanji-Zeichen, die der Philosoph J. W. Heisig auf der Grundlage seiner eigenen Erfahrungen entwickelt hat. Sie hat einen völlig anderen Ansatz als der herkömmliche Kanji-Unterricht und richtet sich an Autodidakten. Das TUM-Sprachenzentrum bietet seit dem Frühjahr 2022 einen Kanji-Intensivkurs an, der diese Methode beinhaltet. In diesem Artikel werden das Kurskonzept und konkrete Praktiken vorgestellt, wie diese Methode des Selbststudiums für gemeinsames Lernen genutzt werden kann.

1 はじめに

漢字をまったく知らない大人が漢字の書き方と意味を学ぼうとする際、主要な障害は二つあります。すなわち教室と日本人教師です。²

James W. Heisig

子供時代に日本の学校で漢字を学んだ日本語教師にとって、非漢字文化圏で育った学習者の目に漢字がどう映るか想像するのは難しい。自己の経験から、何度も書いて体で覚えるという方法論を推奨しがちだが、論理的・抽象的に物事を把握する力のある成人学習者にとっては、全く違ったアプローチの方が効率的だと Heisig は指摘している。

1970年代末、南山大学に招聘されて来日したアメリカの哲学者 Heisig (ハイジック) は、日本語学校で集中的に日本語を学ぶ機会を得た。その際、最大の難関である漢字習得を独自のやり方で 1 か月ほどでマスターし周囲を驚かせた。その方法論を書籍化した『Remembering the Kanji 1: A Complete Course on How Not to Forget the Meaning and Writing of Japanese Characters』(1985. Tokyo: Japan Publications Trading Co. / 2011. 6th edition. Honolulu: University of Hawai'i Press) は、現在に至るまで世界中の日本語学習者に読み継がれているが、Heisig の方法論を教室授業で取り入れたという例は、筆者の知る限りほとんど聞かれない。冒頭の引用にも明らかなように、Heisig は学習者が教室で皆

1 本稿は、2022 年 12 月 3 日にオンラインで行われた JaH 情報交換会で提供した話題をもとに、その後の実践を加筆してまとめたものである。

2 ハイジック (2013: 25)

一緒に同じペースで学ぶという前提に懐疑的である。彼が自著の読者として想定しているのは、自分のペースで学ぶ独学者だ。

筆者の勤務するミュンヘン工科大学言語センターのセンター長も Heisig の著書に感銘を受けた 1 人である。彼の方法論を当言語センターの日本語コースで是非紹介してほしいとの提案を受け、筆者も上記のドイツ語版『Die Kanji lernen und behalten 1: Bedeutung und Schreibweise der japanischen Schriftzeichen』(Heisig/Rauther 2012) を購入してみた。500 ページ以上の分厚い本をパラパラとめくってみると、辞書のように淡々と漢字が並ぶ脇に小さい文字でぎっしりとドイツ語の文章が続き、イラストや図像は皆無のモノクロ印刷³で、ビジュアル的にはあまり読む気をそそられない。しかし序文を読み進めるうちに、日本語母語話者の視点から遠く離れた独自の的方法論に引き込まれ、これを土台として、漢字文化に馴染みのない学習者が主体的に漢字を学べるようなコースのコンセプトを考えてみることにした。本稿はその実践記録である。

まず最初に、当実践の背景として、ミュンヘン工科大学言語センターが提供している日本語コースの概要を紹介する。次に、いわゆる Heisig メソッドについて簡単に説明した上で、それをを用いた当校におけるコースデザインとその実施を具体的に報告する。

2 ミュンヘン工科大学言語センターと日本語コース

ミュンヘン工科大学言語センターは、情報工学や機械工学、化学、物理学など理系の専攻を持つ学生が主に選択科目として様々な言語コースを受講できる全学対象の言語センターである。近年、大学の国際化戦略に伴って言語センターの存在感は増し、2023 年夏学期における全 17 言語コースの登録者数は 9371 人、主要言語であるドイツ語 (DaF⁴) は 16 名の常勤講師と数十名の非常勤講師が約 3400 人の受講生を指導し、英語及びスペイン語コースの受講者も 1000 人を超える。そのうち日本語は、フランス語、イタリア語に次ぐ中規模のスケールで登録者数 478 人、ウェイティングリストの学生も入れると 600 人以上となる。常勤講師である筆者の他、7 名の非常勤講師が A1 から B1 レベルまで計 20 コースを提供している⁵。

当言語センターでは、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) の基準に沿ったコース編成がなされているが、他のヨーロッパ言語に比べて文字学習を含め初級の内

3 この点に関して Heisig は著書の序文で「視覚情報を提供することは読者の想像力を制限することにつながる」(Heisig/Rauther 2012: 17) と説明している。

4 Deutsch als Fremdsprache (外国語としてのドイツ語) の略。

5 近年日本語の人気は大変高く、2023 年夏学期は A1.1 を 5 コース、A1.1 + A1.2 を 3 コース開講したが、初心者クラスにはまだ 200 人近いウェイティングがいた。1 クラスの定員は 25 名で、希望者が多い場合は抽選となる。

容の濃い日本語部門は、A1 及び A2 レベルがそれぞれ 4 つに分かれている⁶。A1 レベルを修了するには A1.1 から A1.4 まで 4 つのコースが必要で、総時間数は 8 SWS だ⁷。使用教科書は『みんなの日本語』で、各コース 5 課ずつ進み、A1.4 修了時点で第 20 課となる。文字に関しては、A1.1 でひらがな及び漢字 4 字（日・本・人・語）、A1.2 でカタカナと漢字 20 字（主に数字や時間表現）、そして A1.3 以降は各コースで漢字 40 字を学び、A1 修了時点で約 100 字、A2 修了時点で約 260 字の漢字を学んだことになる。この履修漢字は日本語能力試験（JLPT）の N4 レベルに相当する。

理系の主専攻を持つ学生が言語学習に充てる時間は限られているが、各学部ごとに多少の差はあれ、主専攻以外に一定数のクレジット（ECTS⁸）を取得することが義務付けられているため、言語コースを履修する学生は多い⁹。言語センターが毎学期実施する受講者アンケートによると、日本語コースで 1 番多い受講動機は「他の国や異文化を理解したい」（76.1%）で、次に続くのが「ECTS 取得」（56.3%）、「交換留学プログラムに参加したい」（43.7%）である¹⁰。

ECTS の取得を目的とした学生の大半が A1 レベルに留まる一方で、ECTS とは無関係に純粋な興味から日本語学習を続ける学生が増えている。筆者が当言語センターでの勤務を始めた 2015 年当時はまだ B1 レベルはなく、大半が A1 レベルで、A2 レベルのコースは成立が危ぶまれたが¹¹、今では A2 レベルのコースもコンスタントに 20 人以上の参加者を集め、B1 レベルのコースも開講している。交換留学制度（TUMexchange）のパートナー校は日本全国の国立大学を中心に 13 校あり、毎年 90 人前後の学生が日本への留学の機会を得る¹²。その準備として日本

-
- 6 4 つに分かれているのは日本語のみ。各レベルを 2 つに分ける（A1.1・A1.2 / A2.1・A2.2...）のが主流だが、ポルトガル語やスウェーデン語、ノルウェー語などは A1 レベルを 1 コースで終わらせることができ、各言語のボリュームに応じてフレキシブルなプログラムが組まれている。
 - 7 1 SWS (Semesterwochenstunde) は週 1 回 45 分の授業 13~14 回分で、通常コースは 90 分 2 SWS だが、2 コースまとめた 4 SWS のコース（A1.1+A1.2 など）や講義休暇中のブロックコースも提供しているので、半年で A1 レベルを終わらせることも可能である。
 - 8 ECTS は“European Credit Transfer and Accumulation System”の略で、EU 圏内の大学間で共通する単位の互換制度。各大学の基準の透明化と学生の流動化に役立っている。
 - 9 2 SWS のコースは 3 ECTS、4 SWS は 6 ECTS に換算される。通常、学生が主専攻以外に必要な ECTS の数は 6 がスタンダードのようだ。
 - 10 2023 年夏学期のアンケート結果で、複数回答可。回答者総数は 71 名で、回収率は約 15%。
 - 11 言語センターのコース成立最低人数は 9 人で、それ以下の場合はコースをキャンセルしなければならない。
 - 12 日本への留学者数は 2022/23 年 94 名、2023/24 年 89 名である。留学者数の上位は東京大学、慶応大学、名古屋大学、九州大学、東北大学、東京工業大学、北海道大学でそれぞれ 8 名以上の枠がある。留學生の選考は大学の国際部（TUM Global and Alumni）が担当

語コースを受講する学生の他、最近では日本からドイツへ帰国後もさらに日本語学習を続ける学生が目立つようになった。さらに修士課程の国際化が進んでアジア圏からの留学生が増え、元々ある程度の日本語力がある学生が A2・B1 レベルのクラスに参加するようになったことも、中級レベルの充実につながっている。このように、当言語センター日本語コースの受講者は実に多様である。

3 Heisig メソッドとは

3.1 Primitive

Heisig の漢字の覚え方に関する本は 2 巻構成で、1 巻目は漢字の字形と意味、2 巻目は漢字の読み方を扱っている。この事実からも明らかなように、Heisig メソッドの最大の特徴は、漢字の意味と読みを切り離したことである。日本語学校滞在時に 1 か月で 2000 字以上の漢字を覚えた Heisig は、「dog」と聞いて「犬」と書くことはできたが、「いぬ」という日本語はまだ知らなかったという (ハイジック 2013: 30)。具体的な日本語の勉強を始める前に、まず全ての常用漢字の字形と意味を頭に入れ、その後に漢字の読みや会話を学んだというのだ。「もし書き方の合理性に対して読み方は非合理的である—あるいは別の原則によってはたらく—とすれば、両方を同時に学ぶわけにはいきません」 (ハイジック 2013: 27) という論理のもと、Heisig はまず書き方の合理性を解き明かすことに集中した。

漢字の書き方と意味を覚えるために彼が編み出した方法論は、一言でいえば、漢字の構成要素を意味づけし、その組み合わせから独自の物語を作り出して記憶に刻み付けるというやり方である。「構成要素」には「部首」も含まれるが、それだけではない。Heisig 独自の命名による要素もあり、彼はそれを「Primitive」と呼んだ。一つの漢字の中に含まれる様々な Primitive から連想される物語は、必ずしも本来の語源と一致する必要はなく、その物語が個性的であればあるほど、個々の記憶に残りやすくなる。

「Primitive」の一例をあげると、「一」は漢字の上部にある場合は〈天井〉¹³、下にある場合は〈床〉となる。「丨」は〈杖〉、「丶」は〈しずく〉で、「ト」は〈魔法の杖〉である。具体的な漢字の例としては、「会」という漢字の上部の部首「ひとやね」は〈かさ〉という Primitive で、それに「一」を加えた形は〈会合〉という別の Primitive になる。一方、下部にある「ム」は〈肘〉という Primitive で、その上に「一」〈天井〉があると、Primitive 〈かべ〉になる。これらの組み合わせから、各自が自由に物語を作れることを Heisig は提案する。

しており、言語センターは関与していない。基本的に主専攻の成績と英語のレベルが重視され、日本語コースの受講は義務ではないが、大学によっては日本語教師による推薦状を義務付けている場合もある。

13 以下、Primitive の名前を示す場合は、やまかつこ 〈 〉を使用する。

3.2 独自の配列

Heisig メソッドにおけるもう一つの大事な特徴は、漢字を習得する順番である。Heisig は自著の序文で、途中読み飛ばしたりせず、必ず最初から最後まで漢字の順番を守って学ぶよう強調している (Heisig/Rauther 2012: 17)。なぜなら、漢字の順番は、それぞれの漢字に使われている Primitive が全て事前に導入されるよう入念に計算されているからだ。最初に導入されるのは「一」や「丨」、「口」「日」のような基本的な Primitive で、その組み合わせによってできている漢字 (品・唱・中・旧など) がまずは一緒に導入され、章が進むごとに少しずつ新たな Primitive が加わっていく。例えば「会」という漢字が登場するのは 814 番目¹⁴で、その直前に Primitiv 〈かべ〉が導入される。Primitiv 〈かさ〉は 265 番「介」の前、Primitiv 〈会合〉は 269 番「合」の前に登場する。

このように、漢字の字形と構成要素を軸にした順番なので、日常でよく使われる簡単な漢字から学習するという従来の方法とは順番が大分異なる。全部で 2200 の漢字が 56 章に分けて配置されているが、それらは以下の 3 つのグループに分類される。

第 1 部 物語 (Erzählungen) 1 章–12 章

第 2 部 草案 (Entwürfe) 13 章–19 章

第 3 部 要素 (Elemente) 20 章–56 章

第 1 部はいわば基本編で、導入される漢字一つ一つに Heisig による物語が詳細に記されている。それを読むことで、読者は様々な Primitive の組み合わせから、どのように物語を紡ぎあげていくのかを習得していく。

第 2 部になると、個々の漢字に関する説明が大分簡略になり、読者が自ら Primitive を組み合わせて物語を生み出すように促していく。

そして第 3 部では、漢字の Primitive だけが記され、それをどう料理するかは完全に読者に委ねられる。ここに、Heisig メソッドの非常にユニークなポイントがあると筆者は考える。Heisig は、それぞれの漢字に一つの正しい物語があって、それを暗記するよう読者に求めてはいない。一つの漢字に無数の物語があつていい。大切なのは、学習者が個々の漢字と主体的に向き合って独自の物語を生み出すことで、その行為によって漢字が学習者の記憶に刻まれていくのである。通常、漢字学習は与えられた膨大なリストをひたすら暗記していく受動的な営みと捉えられがちだが、Heisig は漢字習得を能動的、創造的な営みに反転させたのである。

3.3 漢字の読み

一方、漢字の読み方を扱った第 2 巻目『Die Kanji lernen und behalten 2: Systematische Anleitung zu den Lesungen der japanischen Schriftzeichen』(Heisig/Rauther 2013) は、1 巻目

14 この番号を Heisig-Index-Nr. と呼ぶ。

ほど広く流布していない。1 巻目を修了して 2200 の漢字の字形と意味が頭に入っている学習者を前提としているので、その条件を満たす読者があまりいないのが現実だろう。一貫性のある 1 巻目とは違い、2 巻目の構成は複雑で、辞書のようにランダムに使うことも可能である。読み方の種類や傾向を 11 の章に分けて説明しているが、そのうち 10 章は漢字の音読みを扱っている。音読みの方が漢字の字形と読み方の相関性を見つけやすいからで、読み方に影響を与える Primitive を Signalprimitive と名付け、その種類を以下の 3 つのカテゴリーに分類している。

1. 純粋なグループ (2 章)
2. 半純粋なグループ (5 章)
3. 混合グループ (7 章)

1 は Signalprimitive が例外なく常に一定の読み方と結びついている例で、例えば「中」のつく漢字 (忠・沖・仲) は全て「チュウ」と読まれ、「工」がつく漢字 (功・攻・江・紅・項・貢・巧) は「コウ」と読まれる。2 では、同じように Signalprimitive が一定の読み方と結びついているが、1 つだけ例外がある場合が集められている。例えば「交」がつく漢字 (校・効・郊・絞) は通常「コウ」と読まれるが、1 つだけ例外「較」(カク) がある。「生」がつく漢字 (性・星・醒・姓・牲) の読み方は「セイ」だが、「産」(サン) だけ例外である。3 は例外が 2 つ以上ある場合で、例えば「成」のつく「盛」は「セイ・ジョウ」と読まれるが、「誠」は「セイ」「城」は「ジョウ」のみである。また「未」がつく漢字は「ミ」(味・魅) と読む場合と「マイ」(妹・昧) と読む場合がある。

Signalprimitive 以外のストラテジーとしては、日常的によく使われる表現や熟語を通して読みを覚えるやり方 (6 章・8 章) で、通常の日本語授業で漢字を導入する場合とさほど変わらない。漢字の訓読み (11 章) は、語呂合わせ的な覚え方が提案されているが、日本語の語彙を増やすことで半ば自動的に習得されていくと言える。

第 2 巻目の内容で学習者にとって有益なポイントは、Signalprimitive の存在と傾向を意識することだが、これは形声文字における音符の概念に一致する。一定量の漢字が頭に入っている学習者にとっては、音符という観点から漢字をグループ分けすることで、漢字の音読みをより効率的に習得することが可能となるだろう¹⁵。

15 形声文字の音符を漢字学習に活かすストラテジーは、既に日本語学習者向けの漢字教材で導入されている。例えば、初級者向け教材『Basic Kanji Book』(加納・清水・谷部・石井 2015: 126) では第 14 課で形声文字の概念が紹介され、中級者向けの教材『Intermediate Kanji Book』(加納・清水・竹中・石井・阿久津 2011: 94-97、192-195) でさらに詳述されている。また、山田ボヒネック (2017: 76-79) は日本語教育界における「音符」研究の歴史を体系的に紹介している。

4 Heisig メソッドを取り入れたコースデザイン

4.1 コンセプト

Heisig メソッドの長所を最大限に活かすためには、学習者が主体的に物語を考え、それを発表し合うようなグループワークを中心とした活動が好ましいのではないかと考えた。一方、漢字の意味と読みを切り離す点は、通常の日本語学習者にとっては短所と言わざるを得ない。Heisig 自身は、かなも含めて全く日本語の知識がない状態から漢字の習得を始め、全ての漢字の字形と意味を頭に入れてから漢字の読みに取り組んだが、その方法論を踏襲するのは非現実的である。当漢字コースでは、1日の活動の前半は Heisig メソッドに基づいて漢字の字形と意味に集中するが、後半は、語彙や例文を通して漢字の読みの定着を図ることにした。そのために、最低限ひらがな・カタカナを習得していることを参加条件とした。

コースのコンセプトを日本語母語者ではない視点から具体化していくために、実際に Heisig メソッドを使って独学で漢字を習得した経験のある学生を探して、協力してもらうことにした¹⁶。彼は高校時代、日本語に興味を持ってインターネットで情報を集め、Heisig の方法論を ANKI アプリケーション¹⁷を使って試してみたという。彼の経験に照らし合わせながら 1日に学ぶ漢字の数やコースのボリュームを検討し、まずは 1日 30字以内、10日間で JLPT の N4 に相当する 280字程度習得することを目標とした。

言語センターは学期中のコースの他に、講義休暇中のブロックコースも提供している。ブロックコースは時間をフレキシブルに設定できるので、目的に応じた時間配分が可能である。当漢字コースは全 10回のブロックコースとし、1回 3時間半の授業で 28字を学ぶ設定とした。また、参加者が学んだ漢字を消化する時間を持てるよう、授業は 1日おきに週 3回とした。

4.2 漢字の配分

漢字を習得する順番は Heisig の順番を踏襲し、N4 に相当する漢字¹⁸を抽出した。その結果、第 1日目に取り上げるのは以下の 27字となった。(カッコ内は Heisig-Index-Nr.)

16 ミュンヘン工科大学では、2020年のコロナ禍を機に eScout-Academy を設立し、主に技術面でオンライン化を支援する学生を養成している。この枠内で、言語センター日本語部門でも Heisig メソッドに精通した情報工学科の学生を eScout として採用した。

17 デジタル単語カードとして広く普及しているアプリケーション。Heisig メソッドによる漢字テンプレートもオープンソースとして提供されている。

18 現在の日本語能力試験ではレベル別の漢字リストは公表されていないが、N4 レベルは日常生活でよく使われる 300前後の基本的な漢字と定義する。その選定は、Heisig-Index-Nr.に従いながら、1日 28字以内で、共通する Primitiv などある程度のまとまりをもった漢字群になるように配慮した。全体のバランスを考慮して例外的に Heisig-Index-Nr.の順と異なっている

一 (1) 二 (2) 三 (3) 四 (4) 五 (5) 六 (6) 七 (7) 八 (8) 九 (9) 十 (10) 口 (11)
日 (12) 月 (13) 田 (14) 目 (15) 古 (16) 明 (20) 品 (23) 早 (26) 世 (28) 自 (36)
白 (37) 百 (38) 中 (39) 千 (40) 上 (50) 下 (51)

このうち、一・七・九・十・口・日・月・田・目・古・早・自・白の13字は、
独立した漢字であると同時に **Primitive** でもある。2日目は以下の28字だ。

朝 (53) 貝 (56) 員 (59) 見 (61) 元 (63) 万 (68) 真 (79) 工 (80) 左 (81) 右 (82)
有 (83) 刀 (87) 切 (89) 別 (94) 丁 (95) 町 (96) 子 (99) 女 (102) 母 (105) 兄 (107)
小 (110) 少 (111) 大 (112) 多 (113) 夕 (114) 外 (116) 名 (117) 石 (118)

貝と員の下にある「ハ」は **Primitiv** (動物の足)、見と元の下部は **Primitiv** (人の足) である。工・刀・丁・子・女・母・小・大・夕も **Primitive** だ。このように、漢字を学びながら **Primitive** も一緒に覚えていく。最初のうちは新出の **Primitive** が多いが、だんだん既知の **Primitive** が増え、多くの漢字は複数の **Primitive** の組み合わせでできていることが分かる。3日目以降に習得する漢字は以下の通りである。

3日目：川 (134) 水 (137) 土 (161) 寺 (170) 時 (171) 火 (173) 魚 (183) 里 (185)
黒 (186) 同 (192) 字 (197) 安 (202) 木 (207) 本 (224) 未 (229) 末 (230) 味 (233)
妹 (234) 犬 (253) 牛 (260) 特 (261) 先 (263) 界 (266) 茶 (267) 王 (271) 理 (283)
主 (284) 注 (285)

4日目：金 (287) 首 (74) 道 (295) 車 (304) 前 (309) 夏 (317) 運 (325) 高 (329)
京 (334) 週 (340) 売 (345) 学 (346) 書 (349) 言 (357) 計 (359) 話 (368) 語 (371)
読 (372) 試 (378) 止 (396) 歩 (397) 正 (405) 走 (410) 題 (415) 建 (417) 市 (440)
姉 (442) 転 (449)

5日目：雨 (451) 冬 (456) 天 (457) 立 (462) 北 (480) 毎 (497) 海 (500) 可 (97)
欠 (505) 歌 (508) 音 (518) 方 (529) 東 (543) 地 (554) 虫 (556) 風 (563) 起 (565)
電 (574) 家 (580) 場 (584) 羊 (586) 洋 (588) 着 (594) 集 (601) 午 (610) 羽 (615)
習 (616) 曜 (618)

6日目：国 (624) 店 (632) 心 (639) 思 (651) 意 (654) 手 (687) 持 (712) 研 (729)
友 (760) 広 (799) 台 (805) 始 (809) 去 (812) 会 (814) 至 (815) 室 (816) 出 (829)
山 (830) 入 (842) 公 (847) 堂 (861) 死 (878) 買 (894) 力 (922) 男 (923) 行 (938)
待 (944)

7日目：秋 (966) 私 (968) 竹 (1007) 合 (269) 答 (1018) 人 (1023) 住 (1027) 体 (1030)
士 (341) 仕 (1033) 休 (1038) 使 (1065) 代 (1080) 貸 (1082) 化 (1083) 花 (1084)
何 (1087) 肉 (1098) 以 (1105) 年 (1114) 夜 (1115) 旅 (1127) 物 (1129) 屋 (1138)
昼 (1156) 社 (1173) 近 (1210) 質 (1219)

箇所もある。(たとえば4日目に配置した漢字「首」は、**Heisig-Index-Nr.**に従うと2日目に取り上げるべきだが、筆者の判断で4日目の漢字「道」の前に配置した。)

8 日目：作 (1224) 急 (1229) 事 (1240) 画 (1254) 料 (1262) 図 (1264) 用 (1265)
借 (1270) 度 (1278) 半 (1286) 不 (1302) 矢 (1305) 族 (1307) 知 (1308) 帰 (1316)
弓 (1317) 強 (1321) 弟 (1328) 写 (1336) 考 (1341) 教 (1343) 者 (1345) 父 (1366)
交 (1368) 校 (1371) 足 (1372) 完 (199) 院 (1401)

9 日目：穴 (1413) 空 (1414) 究 (1417) 糸 (1431) 終 (1452) 後 (1479) 服 (1501)
通 (1511) 銀 (1569) 食 (1582) 反 (779) 飯 (1583) 飲 (1584) 館 (1589) 新 (1619)
親 (1621) 青 (1654) 生 (1675) 春 (1690) 漢 (1701) 今 (1711) 予 (1719) 野 (1722)
西 (1728) 南 (1740) 門 (1743) 問 (1744) 間 (1747)

10 日目：開 (1750) 耳 (881) 聞 (1754) 重 (1805) 動 (1806) 病 (1813) 医 (1829)
発 (1840) 文 (1861) 楽 (1872) 央 (1877) 英 (1878) 映 (1879) 赤 (1880) 色 (1890)
業 (1931) 悪 (1951) 円 (1952) 紙 (1971) 来 (2029) 気 (2030) 長 (2070) 鳥 (2091)
勉 (2129) 馬 (2132) 験 (2134) 駅 (2138) 送 (2172)

4.3 授業形態

ミュンヘン工科大学では、コロナ禍の 2020 年夏学期に全学で Zoom によるオンライン授業を導入した。言語センターでは 2021/22 年冬学期まで 4 学期間、授業は全てオンラインであった。2022 年夏学期より対面授業を再開したが、オンライン授業は現在もプログラムの 1 部として定着している。当校はミュンヘン市内の本部キャンパスの他に複数のキャンパスがあり、学生は必要に応じてキャンパス間を行き来するが、オンライン授業は移動にかかる時間を節約できるので、語学授業における需要は高い。A1.1 のように同一内容のコースを複数提供する場合は、2つの主要キャンパス（ミュンヘン市内及び郊外の Garching）でそれぞれ対面授業を行い、並行してオンラインのコースも提供している。一方、A2 以上で同一レベルのコースが 1 つしかない場合は、所属キャンパスに関わらず参加できるオンライン授業を提供するケースが多い。当漢字コースも、なるべく多くの学生が参加できるようオンラインで提供することにした。

学習プラットフォームとしての Moodle は、コロナ以前より使用されていたが、オンライン授業の導入に伴ってその機能をより広く深く活用することが求められた。当言語センターではコロナ禍を機に試験がポートフォリオ形式となり、学生が提出した課題は紙ではなくデジタルで Moodle に保存されている¹⁹。オンライン授業では、Zoom でブレイクアウト機能を使う際、参加者全員が自由に書き込み出来る Moodle のアクティビティ Etherpad を併用すると、教室でのグループ活動とほぼ同じように作業ができ効果的である。Etherpad の書き込みは記録として残り、参加者が必要に応じていつでも参照できるのも便利だ。

19 ポートフォリオ試験は Moodle 上のオンラインテストの他、Aufgabe 機能を利用した音声データの提出など、各コースごとに多彩な課題を課している。

通常の語学コースでは試験の結果、合格すれば ECTS が付与されるが、試験を行わず、ECTS につかないコースを提供することも可能である。その場合、ECTS の取得を目的とした学生は参加せず、純粋な興味から学びたい学生のみが対象となる。当漢字コースは Heisig メソッドを通して学生が漢字に親しむことが目的であり、実際にどれだけ漢字を覚えたかを評価することが目的ではないので、試験及び ECTS のないコースとして提供することにした。

4.4 授業構成

1 回につき 3 時間半の授業の前半は、漢字の字形と意味を覚えるための活動をし、後半は語彙を通して読みを覚える活動をする。具体的には、前半はまず一つの漢字の書き方と構成要素 (Primitive) を確認し、いくつかのグループに分かれて担当漢字を決め、その漢字の物語を考える。構成要素から連想される物語をグループごとに Etherpad に書き留め (1 つの漢字に複数の物語があってもよい)、その後皆の前で発表する。例えば 4 つのグループが 2 つずつ漢字を担当する場合、まず全員で 8 つの漢字の書き方と意味、構成要素を確認し、その後ブレイクアウトルームでグループ活動、それからまた全員でそれぞれの物語を共有する。この一連の活動に要する時間は 20 分～30 分で、これを 3～4 回繰り返す。

後半の活動は、まずクイズ形式で、前半に習った漢字を使った熟語を見せ、その意味を推測させる。例えば 1 日目の漢字を使った言葉は「早口」「明白」「三日月」「中古品」などだ。それらの言葉を通して漢字の読みを確認し、その後は再びグループ活動で、習った漢字や熟語を使って文を作り、Etherpad に書き込む。このコースでは基本的に文法は扱わず、授業で使用する言語もドイツ語だが、文を作る活動では、参加者それぞれの日本語力に応じて個別指導する。

今回の授業は、前回の授業で取り上げた漢字の復習クイズから始め、その後にもまた新しい漢字の字形と意味を覚える活動をする。漢字の数が増えるにつれて、それをういた言葉の数も飛躍的に増えていく。クイズで取り上げた熟語の中から、よく使われる大事な言葉の意味と読みを確認するオンラインテストを Moodle で作成し、各自が自由に何度でも試せるようにした。また、このコース用にアレンジした ANKI アプリのテンプレートを提供し、自習用に使うことを勧めた。

5 実践記録

5.1 2022 年パイロットプロジェクト

上に記した授業構成は、2022 年 3 月にパイロットプロジェクトとして初めて開講した際、試行錯誤しながら徐々に固めていった形である。コース名は「Blockkurs Japanisch A1/A2 – Kanji N5/N4 nach Heisig-Methode」(以下 Kanji N5/N4) という。A1/A2 というのはかなり広い枠組みだ。初心者にとって短期間に漢字を

280 字習得するという目標はかなりのチャレンジである。どんな顔ぶれが集まるか、ふたを開けてみるまで分からなかったが、17名の申込があった。Moodle上で事前に行ったアンケートには16名が回答し、そのうち7名は知っている漢字が「0～10」で、「10～20」及び「20～50」を選んだ回答者はそれぞれ2名、「50～100」は4名で、「200以上」と答えた回答者も1名いた。

コース初日に実際参加したのは、しかしながら10名以下だった。言語センターの授業は義務ではなく自由な選択コースなので、申込者数と実際の参加者数に開きがあるのは珍しくないが、全くの初心者とA2レベルの学生が共に学ぶコースはほとんど例がない。先の見えぬ手探りのスタートだったが、ドイツ語や英語で漢字の物語を作る活動は参加者の日本語力に関わりなくスムーズに進み、少人数のアットホームな雰囲気の中で色々と試してみることができた。最後まで残った数人の強い希望で（最終日の出席者は初日のさらに半数に減った）コースの第二弾を提供することになり、同年9月に「Blockkurs Japanisch B1 – Kanji N3 nach Heisig-Methode」（以下 Kanji N3）を開講した。このコースでは同じ授業構成で1日32字、合計320字を取り上げ、2つのクラスを合わせると600字習得したことになる。B1レベルの対象者数は限られているが、パイロットプロジェクトとして少人数で更なる試行錯誤を重ね、今後は春の講義休暇期間に Kanji N5/N4、夏の講義休暇期間に Kanji N3 を継続して提供していくことにした。

5.2 2023年 Kanji N5/N4 コース

2度目の開講となった2023年春の Kanji N5/N4 の実践結果を具体的に紹介する。Kanji N5/N4 コース2回目の申込者数は19名で、そのうち18名が Moodle 上の事前アンケートで知っている漢字の数を以下の通り回答した。

0～10	6名
10～20	3名
20～50	4名
50～100	1名
100～200	4名
200～	0

約30%がA1.1レベル、約50%がA1.2～A1.4²⁰、そして残り20%はA2レベルという構成である。このうち継続的に出席したのは10名前後だが、レベルの分布は上述と変わらない。1日目のグループ活動で作った漢字の物語の例を、Etherpadからいくつか引用する。

20 前述の通り、当言語センターの日本語コースでは、A1.1で習う漢字は10字以下だが、A1.4修了時点で漢字を約100字学んだことになる。

早

- Wenn die *Sonne* um 10 Uhr aufgeht ist es **früh**
- Jemand der sich vor dem Fenster streckt
- *Sonne* über dem *Kreuz*, man geht morgens **früh** in die Kirche

1 つ目のストーリー「日が 10 時に昇ったら、早い」は「日」と「十」という構成要素と漢字の意味をコンパクトに結び付けている。3 つ目「十字架の上に日が昇り、朝早く教会へ行く」は、2 つの構成要素がより豊かなイメージで組み合わせられている。また 2 つ目「誰かが窓の前で伸びをしている」は字形から、窓の前に立つ人を連想している。ちなみに、Heisig オリジナルの物語は以下の通りだ。

Dieses Kanji ist ein Bild der ersten Blume des Tages, die wir – aller botanischen Wissenschaft zum Trotz – als *Sonnenblume* identifizieren werden. Denn das Zeichen beginnt mit dem Element *Sonne* und wird von einem Stängel mit Blättern getragen (dem Piktogramm der letzten beiden Striche). ... An die Bedeutung **früh** erinnert man sich leicht, wenn man von der *Sonnenblume* als der **Früh**aufsteherin in einem Sommergarten denkt. ... (Heisig/Rauther 2012: 36)

Heisig は、「早」という漢字の形からひまわりの花を連想し、夏の朝早く咲く花と意味づけている。このように、1 つの漢字に関する物語は人の数だけ無数に存在すると言っていい。学生はそれを瞬時に理解し、楽しみながらたくさんの物語を作っていた。もう一つ、「品」の例を紹介する。

品

1. Wenn man sehr viel **Ware/Produkt** hat, braucht man sehr viele *Münder* (in diesem Fall 3), um alles zu essen
2. Drei Kästen/Pakete -> **Ware**
3. *shina* Leseweise -> Viele **Waren** kommen aus *China* / werden über *Schienen* transportiert
4. *shina* / *hin* Leseweise -> Über *Schienen* bringt man **Waren hin**

1 つ目のストーリー「たくさんの品数があると、全部食べるには少なくとも 3 つの口が必要だ」と 2 つ目「3 つの箱／品物」は漢字の構成要素と意味を結び付けているが、3 つ目と 4 つ目は、いわば語呂合わせのように漢字の意味と読みを結び付けている。3 つ目は「たくさんの品物は中国（ドイツ語 *China* の発音はシナ）からくる / 鉄道（*Schienen* の発音はシーネン）で運ばれる」という 2 つの文の中に掛詞のように「シナ／シーネン」という音を入れ、4 つ目は「鉄道で品物を運ぶ」というドイツ語の文の中に「シーネン」と「ヒン」という音が入っている。このように漢字の読みもストーリーに取り込むことは筆者の想定を超えていて、学生の自由な創造力に脱帽した。

漢字の形や構成要素から物語を考えるグループ活動は、日本語力に差のある学生同士でも問題なく楽しめ、上記のようなストーリーを 5 分以内に協働で作り上

げた。一方、習った漢字や熟語を使って文を作る後半のグループ活動では、日本語レベルの違いが如実に表れた。1日目に作った例文をいくつか引用する。

月は白いです。

早口ことばはむずかしいです。

けいさつで自白したいんですが…

一目ぼれして告白したけど、あの人は白い目で見たんだ。

上の2つの文はA1レベルの学生が、下の2つはA2レベルの学生が書いたのは一目瞭然だろう。「自白」「一目ぼれ」「白い目でみる」など、必ずしも大事な言葉とは言えないが、読み方の例として面白い言葉もクイズに取り入れている。学生はそれらの言葉をゲーム感覚で組み合わせ、それぞれの日本語力に応じて例文を書いていた。ちなみに4つ目の文は最初、「告白」ではなく「自白」という熟語が使われていた。「Geständnis」というドイツ語訳から発想したようだが、語感と使われ方が違うことを説明し、「告白」という単語に置き換えた。このように、漢字や熟語を自由に組み合わせる文を作る活動は、それぞれのレベルに合った指導が可能で、語彙力を飛躍的に伸ばす可能性を秘めていると思われる。

以上は全て、コース1日目の例である。漢字の難易度が上がるコース後半の例もいくつか紹介する。以下はコース9日目に考えたストーリーだ。

究

1. Ich bin beim **Erforschen** schon *neumal* ins *Leere* getappt.
2. Ich bin beim **Forschen** auf ein *Loch* mit *neun* Meter Tiefe gestoßen.
3. Lesung *neun* = キュウ

「究」は2つの構成要素「穴」と「九」からできている。1つ目と2つ目のストーリーは、この2つの言葉と「研究する」という漢字の意味を簡潔に結び付けている。3つ目は、構成要素「九」が音符として機能していることへの気付きがある。

春

1. Im 3. Monat März beginnt der **Frühling**. Die *Tage* werden länger und die *Menschen* beginnen die *Felder* zu bestellen Lesung: Im **Frühling** wird es wieder *schön* (シュン)

「春」は「三」と「人」と「日」の3つの構成要素からできているが、上記のストーリー「春は3月に始まる。日は長くなり、人は畑仕事を始める」には、それらが詩的な趣でおさまっている。また、「春は素敵な季節だ」というドイツ語の文に使われる「schön」という単語から音読み「シュン」を連想するのは、とてもいいアイデアである。

野

1. Meine *Heimat* bestand *früher/vorher* nur aus einem **Feld**, bis sie sich zu der Heimat von heute entwickelt hat.

2. *Früher* gab es in meiner *Heimat* viele **Felder**. Jetzt wurde überall gebaut.

Findet ihr die Neubaugebiete gut? Bitte ankreuzen: の (no), ヤ (ja)

「里」と「予」の組み合わせから、「以前は野原だった私の故郷に、今はたくさんの建物がある。それに反対 (no)、賛成 (ja)？」というストーリーを作り、「野」の意味だけでなく、読み「の・ヤ」も組み込んでいるのは遊び心があり、学生が笑いながらストーリーを作っている様子が伝わってくる。

このように、コースの終盤までに約 250 字の物語を共に作り上げてきた学生達には、漢字の構成要素を結び付けた物語に漢字の読みも織り込んでゆく豊かな創造力が育まれたようだ。

5.3 漢字の定着度

Heisig メソッドを通じて漢字と戯れてきた学生たちは、実際にどのぐらい漢字を記憶しているだろうか。コースの 3 日目、6 日目、9 日目に、クイズで扱った重要な熟語の意味と読みを確認するオンラインテストをした。10 の熟語のドイツ語訳に、対応する漢字とその読み方をそれぞれドラッグアンドドロップで選択する方式で、例えば「*früh morgens*」とあれば「早朝」と「そうちょう」が正解だ。3 日分の漢字は 83 字である。1 回目のテストは以下の 10 の熟語を取り上げた。

早朝・有名・大切・明白・中古品・世界・特別・月末・同時・真理

このテストは、自分の到達度を確認するために何度でも試せるが、授業中に実施した 1 回目の成績が Moodle に記録されている。それによると、12 人中 9 人は満点であった。残りの 3 人はいずれも初心者で、正解率はそれぞれ 85%・65%・60% である。彼らの答案を見てみると、ドイツ語訳に漢字をあてはめる箇所の正解率は 100%・100%・80% で、ひらがなによる読みを選ぶ方は 70%・30%・40% だった。この結果から、漢字と意味の結びつきはかなり定着していることが分かる。正しい読みを選べるかどうかは、既知の日本語の語彙がどのぐらいあるかにもよるだろう。同じように、第 2 回目のテスト結果も分析してみる。6 日間で合計 166 字習得した後に、以下の 10 の熟語を同じ形式でテストした。

電話・時計・自転車・外国・読書・集中・意味・安心・店員・運転手

7 人中 5 人が満点で、残りの 2 人はそれぞれ 90%・80% の正解率だった。前回 60% だった学生が 90% となり、「意味」と「読書」の漢字を逆にしていたほかは全て正解だった。第 3 回目はどうか。9 日目に合計 250 字を習得した後のテストで、以下の熟語を取り上げた。

7人中やはり5人が満点で、2人が80%・55%である。55%の学生の正解率は漢字を選ぶ方が60%、読み方が50%だった。2回目のテストに比べて抽象的な言葉がやや増えたことから、意味と漢字を結び付けるのも容易ではなかったようである。

一方、これまで常に満点の学生は、事前のアンケートで知っている漢字数は10～200を選択している。彼らにとっても知らない漢字が混じっているはずだが、2分～8分で全員正しい答えを見つけることができた。

さらに最終日にも、今まで習った全ての漢字(278字)を対象として同じ形式のテストをしたが、結果は明白であった。今まで満点だった学生は引き続き満点を維持し、初心者学生の正解率は50%(漢字66%、読み方33%)・46%(漢字46%、読み方46%)であった。このことから、既に日本語コースで基本的な語彙のある程度学んだ学生は、当コースのボリュームを問題なくこなせたことが分かる。一方、A1.1レベルの学生は、具体的で分かりやすい熟語の場合は漢字と意味を認識できるが、抽象的な漢字や知らない言葉が増えると消化不良を起こすようである。

5.4 フィードバック

コース終了後のフィードバックには6人が回答した。そのうち、今まで受講した日本語コースは3人がA1.1、そしてA1.3、A1.4とA2.1+A2.2が各1人ずつだった。コース前に知っていた漢字数は10以下が2人、20～50と50～100が1人ずつ、そして100～200が2人である。

まずコースのボリュームに関する質問には、合計280字習得という目標は「多すぎる」が1名、「ちょうどいい」が5名であった。1日28字というペースは2人が「多すぎる」、4人が「ちょうどいい」と答えた。授業のテンポに関しては、全員が「ちょうどいい」と回答した。コースの満足度やHeisigメソッドについて5段階(満点は5)で評価した平均値を以下に記す。

このコースが気に入ったか。	4,50
自身の学習結果に満足しているか。	4,00
Heisigメソッドは効果があるか。	4,17

Heisigメソッドに関してもう少し具体的に聞いた「漢字の意味を覚えられたか」という質問には全員が肯定的に回答したのに対し(はい:3名、大体:3名)、「漢字の読みを覚えられたか」という質問には、「大体」が4名、「いいえ」が2名で、「はい」という答えは1人もいなかった。一方、協働学習がうまくいったかという質問にも5段階で答えてもらったところ、漢字のストーリーを作る活動の平均値は4,67、文を作る活動の平均値は4,50であった。共にかなりうまくいったと言える。グループ分けはZoomによってランダムに行い、レベル別ではない。

前半のストーリーを作る活動は問題ないが、後半の文を作る活動はレベル別の方が効果的ではないかと筆者は推測していたが、「レベルの違う学習者と協働で文を作る活動はどうだったか」という質問に、3人が「問題ない」、3人が「多くのことを学べた」と答え、「同レベルの学生と学んだ方がよかった」という選択肢は誰も選ばなかった。自由回答の欄には「自分より日本語レベルが上の学生と協働で文を作るのは、知らない文法事項が多いため最初は難しかった」「自分よりレベルが上の学生から色々教えてもらうことができた」等のコメントがあった。

その他、楽しかった活動を挙げる欄には、物語を考えるグループ活動・クイズ・文を考えるグループ活動をそれぞれ複数人が挙げた。「自分で面白い物語を考えると、本当に記憶に残る」「習った漢字を使いこなすには、もっと勉強が必要」「自分にもっと語彙力があれば、漢字の読み方をもっと覚えられたと思う」等のコメントがあり、A1.1レベルの学生は「最初の数回は28の漢字を覚えられたが、回が進むごとに覚えられる漢字の数は減っていった。でもいくつかの漢字は確実に記憶に残っている。今後もこのメソッドを活用していきたいと思う」と総括した。「ANKIアプリを利用しているか」という質問には6人中4人が「はい」と答えた。

6 まとめと今後の課題

Heisig は、教室で皆が同じペースで学ぶことに否定的であった。しかし、様々なレベルの学習者が教室で助け合いながら学ぶことは想定していなかったかもしれない。漢字を構成要素に分解し、その組み合わせから様々な物語を作り出すメソッドは、日本語力の違いを超えて学習者が共に楽しめる有効な方法論であった。アイデアを出し合い、互いのストーリーを共有することは、1人でこつこつと物語を作っていくよりも楽しい道のりではなかっただろうか。それは、マラソンの道のりを1人で孤独に走るより、誰かと一緒に走る方が楽に感じられることにも通じる。

しかし、このコースは長い道のりの始めの一步に過ぎない。大切なのは、学習者がコース終了後、いかに漢字学習を継続していくかである。「漢字を授業で扱うことの意義は、さまざまな漢字学習の形態と教材を紹介し、個々の学習者が自分にあう漢字学習方法を編み出していくところにある」と田村(2009: 76-77)は書いているが、当コースの目的もまさにそこにある。学習者が今後一人で漢字の海を航海していくとき、Heisig メソッドは羅針盤として自律学習を支える重要な戦略となるだろう。さらに、ANKI アプリを活用して既習の漢字を忘れないよう繰り返しチェックし、日本語の読解活動を通じて語彙を増やすなど、各自の地道な努力が欠かせない。

学習者のフィードバックや定着度の分析からも明らかなように、漢字の習得と並行して、日本語の文法や語彙と一緒に学んでいくことは必須の条件である。そ

の意味で、まず最初に全ての常用漢字の字形と意味を頭に入れてから、日本語の勉強を始めたという Heisig 自身の経験は極めて例外的と言わねばならない。通常の日本語学習者にとっては、漢字学習と、文法や会話を学ぶ総合日本語授業が相乗効果を及ぼすのが理想的だと言える。

当漢字コースの今後の課題として、以下の2点を挙げたい。

1. 漢字の読みの定着
2. 熟語の成り立ちと漢字学習の関連付け

初心者にとって、漢字の字形と意味は結び付けやすいが、読みはなかなか記憶に残らないようである。Primitive を学ぶ際、それが音符として機能する場合は、その事実も一緒に覚え、意識的に漢字のストーリーに織り込んでいくのも一つの手かもしれない。また、漢字の音読みは単独で覚えるより、語彙を通して覚える方が効果的だが、1つの漢字を使った熟語を同時に複数学ぶことで、学習者は日本語の熟語の形成により意識的になるだろう。熟語のメカニズムを習得することは、日本語の語彙力を飛躍的に伸ばすことにつながっていく。

これらのストラテジーを、学習者が協働学習を通して主体的に学び、自律学習に活かしていけるよう、今後も実践を重ねていきたい。

【参考文献】

Heisig, James W. / Rauther, Robert 2012. *Die Kanji lernen und behalten 1: Bedeutung und Schreibweise der japanischen Schriftzeichen*. Frankfurt am Main: Klostermann.

Heisig, James W. / Rauther, Robert 2013. *Die Kanji lernen und behalten 2: Systematische Anleitung zu den Lesungen der japanischen Schriftzeichen*. Frankfurt am Main: Klostermann.

加納千恵子・清水百合・谷部弘子・石井恵理子 2015. 『[新版] BASIC KANJI BOOK – 基本漢字 500 – VOL.1』 凡人社, 東京.

加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智 2011. 『INTERMEDIATE KANJI BOOK – 漢字 1000Plus – VOL.1 改定第3版』 凡人社, 東京.

田村直子 2009. 「漢字学習ストラテジーを学ぶ授業：実践報告」 『Japanisch als Fremdsprache』 Vol. 1, 62–78.

ハイジック, J・W. 2013. 「漢字の書き方を独学でより速く身につけることについて」 『JSL 漢字学習研究会誌』 第5号, 25–35.

山田ボヒネック頼子 2017. 「グローバル時代：『“KanjiKreativ” 採択—文化記号学的漢字教育』 のすすめ」 『Japanisch als Fremdsprache』 Vol. 5, 43–89.